ジャズの巨人たち③　アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズ《モーニン》

ハード・バップの絶頂期を標し ファンキー・ブームに火をつけた名盤

1954年2月21日、ニューヨークきってのヒップな社交場と謳われた「バードランド」に、アート・ブレイキー率いる新進気鋭のクインテットが登場した。

このときブレイキーは34歳。ジャズ・メッセンジャーズの名義を巡って、後に袂を分かつことになるホレス・シルヴァー（ピアノ）とカーリー・ラッセル（ベース）のリズム・セクションに対して、新鋭のクリフォード・ブラウン（トランペット）とルー・ドナルドソン（アルト）をフロント・ラインに配した五重奏団は、この夜集まった人々を狂喜させる熱演を繰り広げた。

当夜の演奏が“歴史的”な名演としてジャズ界の語り草となったのは、これがいわゆる“ハード・バップ”ジャズの実質的な開始宣言となったからにほかならない。ことにわずか24歳ながら輝かしい音色と流麗な奏法で魅了するトランペットのブラウン〔8月号の本欄参照〕は一躍、ディジー・ガレスピー、マイルス・デイヴィスを脅かすホープとしてにわかに脚光を浴びた。

この演奏は《ア・ナイト・アット・バードランド》（ブルーノート）として2枚のLPに収められて発売され、今日、歴史的名盤と位置づけられている。多くの識者やファンがブレイキーの代表作にこの1作を挙げる理由がここにある。今回の《モーニン》との比較でいえば、前者がハード・バップ誕生の瞬間をリアルに活写した1作であるのに対し、本作はハード・バップというモダン・ジャズのスタイルがこの時期、最高度に成熟した季節（とき）を迎えていたことを示す代表的な傑作のひとつ。この1作こそは当時“ファンキー”の名でジャズ界に広まりつつあった潮流を、ヨーロッパや日本を巻き込む一大ブームにまで発展させる役割をになった最大の作品となった。

以上に述べた背景や違いがあるからか、前者が玄人筋から高い評価を得、他方このアルバムの方はファン一般に広く認知されていて人気も高い。だが、どちらも折り紙つきの傑作には変わりがない。ブレイキー名義のリーダー作としては容易に甲乙をつけがたい作品で、もし初心者に意見を求められたら、（順序は逆だが）本アルバムから入って次に《バードランドの夜》に進むのがよいと助言するしか手が無さそうだ。

＊

さて、「バードランド」での五重奏団を母体にした形でジャズ・メッセンジャーズが誕生したのは、翌55年2月のこと。シルヴァーが退団した56年、名実ともにリーダーとなったブレイキーは次々に有能な若手を起用し、名コンボ（小編成楽団）に仕立て上げていく。彼の際立

悠　雅彦（音楽評論家）

《MOANIN'／ART BLAKEY AND THE JAZZ MESSENGERS》

った頭のよさ、それは優れた新人の登竜門たる清新なバンド作りを常に心がけるとともに、傑出した音楽監督を置いて音楽面には余計な口出しをせず、自身はドラマーとして演奏の推進役に徹した点にある。

そのジャズ・メッセンジャーズの快進撃が始まったのは、音楽監督としてシルヴァーの後釜にテナー奏者のベニー・ゴルソンを迎え、彼の進言でリー・モーガン（トランペット）、ボビー・ティモンズ（ピアノ）、ジミー・メリット（ベース）らの新人を抜擢した58年秋のことだった。ときにモーガンは弱冠20歳。才気を迸らせるブリリアントな彼のトランペットはたちまち評判を呼ぶ。他方、ナイアガラ・ロールと形容された見せ技とともにソロイストを巧みに鼓舞するブレイキーのドラミング、およびゴルソン・ハーモニーで名高いゴルソンの魅力的な作編曲などと相まって、ジャズ・メッセンジャーズはモダン・ジャズ黄金時代の最も花のあるグループとして人気を博し、世界のジャズ界を席巻する活躍をするにいたった。本作品はこの名門バンドの記念すべき第１作で、58年10月に吹き込まれて翌年の劈頭を飾った。

一方、ブレイキーのもとを去ったシルヴァーも優秀な人材を登用して五重奏団を結成し、人気を競い合った。彼らが演奏する音楽はともにゴスペル風な独特の旋律をもっていたが、これが“ファンキー”と呼ばれるジャズの流行に火をつけることになった。

この黒人スラングが広く流布しはじめたのは55年ころ。同年ミルト・ジャクソン〔MJQのヴィブラフォン奏者〕が吹き込んだ『オパス・デ・ファンク』はシルヴァーの作曲になるものだった。彼はこの頃から『プリーチャー』『ドゥードリン』『シスター・セイディー』等々の曲を次々と吹き込み、まさにファンキー・ジャズの先駆者としてブームに火をつける決定的な働きをしたといってよいが、このブームの頂点に立ったのがジャズ・メッセンジャーズによる『モーニン』の爆発的ヒットだったのである。

『モーニン』はいわば黒人教会での祈り（詳しくは本誌２月号の「教科書教材ノート」参照）。ピアノのティモンズの作曲で、牧師と信者の応答を模したゴルソンの編曲がすばらしい。ファンキー流行の裏には激化しつつあった黒人解放運動のもとで起こった文化的ルーツの再認識がある。その誇りと自信からくる、何ものにも屈せぬ（ハード）闘志やユーモアを活きいきと表現したモーガンのソロを初めとする本曲や『ブルース・マーチ』の快演は、ジャズ・メッセンジャーズの名を不滅にするものだ。